
【特集】平塚らいてう関係資料

特集にあたって

榎 一江

大原社会問題研究所は、平塚らいてうに関する資料を受贈し、その整理・公開を進めるとともに、平塚らいてう資料研究会（代表：榎一江）を組織して共同研究を実施してきた（その経緯については榎一江「史料散歩——らいてうと婦人運動の時代」『日本歴史』（掲載予定）を参照）。

共同研究で追究したのは、「日本資本主義の成り立ちが女性の社会的環境にどのような影響を与えたのか」という問題である。従来、近代日本の女性史は女性解放運動の担い手に焦点を当て、平塚ら知識人の評論を分析対象としてきた。一方、日本資本主義の発展を底辺で支えた女性労働者は、ほとんど資料を残さず、ストライキ等の行動が記録されるのみであった。しかしながら、平塚らが女性だけの手による文芸誌『青鞥』を創刊したのは女性工場労働者の保護を目的とする工場法が公布された1911年であり、国家による母性保護は両者に共通する重要なテーマであった。1918年から19年にかけて、国家による母性保護を訴えたらいてうに対し、女性の経済的自立を主張する与謝野晶子が批判し、のちに山川菊栄らも加わって「母性保護論争」が展開されたことはよく知られている。実際、らいてうは、1919年に名古屋の紡績工場を視察してその悲惨さを憂い、1920年に市川房枝らと新婦人協会を設立して婦人参政権運動を展開する際、その機関誌『女性同盟』の創刊にあたって、「将来母となるべき多くの娘たちが工場において資本家の利己心の犠牲となって、彼女の若々しさと愛情の豊かさと彼女にとって何より大切な母性とを破壊されねばなりません」と嘆き、女性の地位向上を訴えた⁽¹⁾。このように、女性解放を目指す女性知識人の多くは、悲惨な境遇にある女性として工場労働者に言及し、彼女らの言説が女性の声として流布するとともに政策に一定の影響を与えたと考えられる。こうした女性知識人の言説と女性労働者の現実とを切り結び、近代日本の知識人層と労働者層とを包括した女性の社会的環境に関する学術的な研究を推進することを本研究は目指した。デジタルアーカイブの構築を含むこの研究計画は、日本私立学校振興・共済事業団による学術研究振興資金（2022年度～24年度）の配布を受けることができた。

ところで、資料を収集して整理・公開することとそれを使って研究することは本来、別の作業である。それぞれに高い専門性を要するため、専門家を集めた共同研究が有益である。さらに、研究所は資料を利用可能な状態にしておく役割をも担っているため、我々は資料整理と撮影を先行させ、法政大学大原社会問題研究所ワーキング・ペーパーNo.60『平塚らいてう関係資料目録』（2024年3月）として、まず、目録を公開した。そして、資料を読み込むとともに、その公開を記念し、

(1) 「社会改造に対する婦人の使命——『女性同盟』創刊の辞に代えて」小林登美枝・米田佐代子編『平塚らいてう評論集』岩波書店、2019年、159頁。らいてうの代表的評論は岩波文庫で読めるので、参照されたい。

2024年8月から10月にかけて「らいてうと婦人運動の時代」と題する展示会とシンポジウムを開催した。その概要は後掲のとおりであり、展示会に際しては図録を日英両語で作成し、来場者やフランスで開催された国際会議で配布した。シンポジウムでは、湯澤規子による基調講演『「焼き芋とドーナツ——日米シスターフード交流秘史」をめぐって』につづき、平塚らいてう資料研究会報告が実施された。展示を担当した井上直子、資料整理とデジタルアーカイブの構築を担当した堀内暢行がその概要を報告し、差波亜紀子が「らいてうと家事労働」について講演した⁽²⁾。

こうした活動を踏まえ、本特集「平塚らいてう関係資料」は、研究会メンバーによる資料紹介を掲載することにした。ここでは、平塚らいてう関係資料のアーカイブズ学的検討に加え、主に戦前期の資料に焦点を当て、らいてうの足跡に迫る。

堀内暢行「現代個人アーカイブズの整理・公開方法に関する一試論——平塚らいてう関係資料の場合」は、この資料群の整理及びデジタルアーカイブ構築を担ったりサーチ・アシスタントによるアーカイブズ学的検討である。

北口由望『平塚定二郎聞き書き』については、シンポジウムで司会を務めたHOSEIミュージアム担当教員による論稿で、1940年から41年にかけてらいてうが父の半生を聞き書きしたノートを取り上げる。5回に分けて記された聞き書きの一部を翻刻して、らいてうの人格形成に大きな影響を与えたとされる父の姿を浮かび上がらせるとともに、近代日本における独逸学の受容や明治

(2) 残念ながら、平塚らいてう資料研究会報告のファヨル入江啓子「平塚らいてうにおける女性の階級化の問題」はやむを得ない事情によりキャンセルされた。他日を期したい。

期の学生、官吏制度の歴史にとっても魅力的な史料であることを示している。

差波亜紀子「女中を通して見出された女工労働環境問題」は、大正11年から翌年にかけて、女中の紹介を依頼した阿久津銀蔵とのやり取りを取り上げる。らいてうが女中を通して、女工の労働環境の改善に課題を見出し、新婦人協会の活動に至る過程を描く。らいてうに関する著作もある筆者ならではの分析である。

井上直子『我等の家』での消費組合運動と平塚らいてう——平塚らいてう関係資料を用いては、女性史を専門とし、「らいてうと婦人運動の時代」展を担当した兼任研究員による論稿である。昭和期にらいてうが取り組んだ消費組合運動を取り上げる。

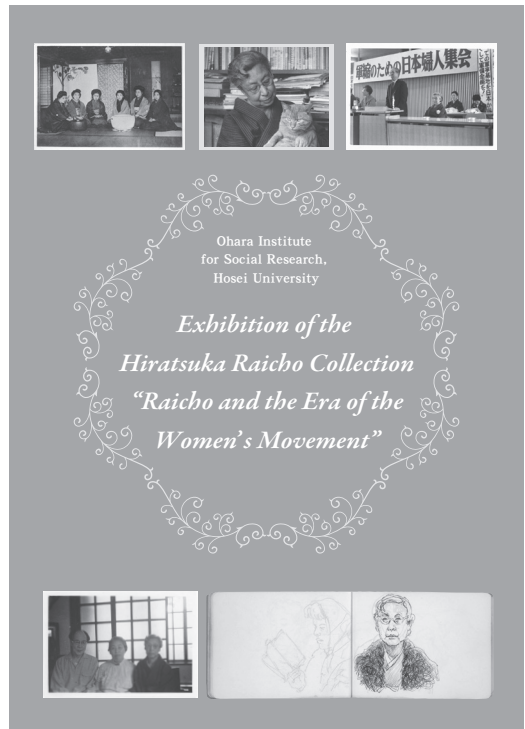
以上のように、この特集では、共同研究の一環として戦前期のらいてうに関する資料に焦点を当てた。法政大学大原社会問題研究所所蔵平塚らいてう関係資料には、むしろ戦後の活動に関する資料が多く含まれており、本格的な議論はこれからである。多くの方に活用していただければ幸いである。

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）

付記：本研究は、日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金（2022年度～24年度）の配布を受けたものである。



図録



英語版図録